

「明治学院の将来像を考える

21世紀フォーラム」と共生

三浦 恵次

わたくしは最近、「戦争と宣伝」の問題に少し興味をもっていますので、明治学院国際平和研究所発行の「平和研レポート」を楽しみに待っております。いま読んでいる第3号には坂本義和先生の「民主主義の地球化」という論説（神奈川新聞、1993年4月30日付）が添付されています。これを読んで、民主主義の地球化のための『共生』の原理を教わりました。坂本先生はこう述べています。「……国連も、民族の『自決』というだけでなく、民族の『共生』という観点から、民族差別による人権侵害への国際的な批判と介入という役割を増しつつある」と。場違いの発想とは承知の上で、こう言い換えさせていただきます。「明治学院は、大学、高校、中学の『自決』というだけでなく、それぞれの『共生』という観点から、それぞれの発展を促す役割を増しつつある」と。

ところで、明治学院の現状はどうでしょうか。結論的に言いますと、わたくしは明治学院がこのような役割を十分に果たしているとは思いません。この結論を検証するまえに、まず1993年度明治学院勤務員研修会の記録により、中学・高校の各種の教育実践を簡

単に要約してみます。(1)中学・高校は大学の制約が大きくとも、教育のアイデンティティの樹立に努めてきた。(2)そのアイデンティティさえも失いかける重大な試練のなかで人格教育を模索してきた。(3)「入試のない教育」をスローガンに掲げつつ、選別教育や差別教育を廃止してきた。(4)いくつかの地域や団体との協調・連帯を通して、歴史教育、平和教育、福祉教育などに取り組んできた。

大学は以上の中学・高校の教育実践を、どのように理解しているのでしょうか。案外、理解が少ないのではないのでしょうか。ましてや、各種の教育実践のなかで優秀な生徒や功労のある生徒たちを大学が受け入れることなど、大変難しいようです。はっきり言いますと、大学のこのような理解には、それこそ『共生』の原理が欠落していること。たしかに、明治学院には大学と中学・高校との一方的な関係があります。『共生』の原理に立つと、その関係を中学・高校からみなければなりません。ひとつの貴重な例を挙げさせていただきます。明治学院にも身を粉にして『共生』の原理を実践した先生がおります。敬虔なクリスチャンで、社会学部教授、東村山中学・高校長をも勤められた宮崎道弘先生です。先生は東村山中学・高校の人格教育の基礎をつくり、その意味合いを大学に理解してもらうよう努力されました。

明治学院にはいまや、この『共生』の原理の実践に共鳴できる勤務員の輩出が期待されています。

『共生』の原理から、多くの勤務員が議論し、理解し合う場として、「明治学院の将来像を考える21世紀フォーラム＝学院勤務員代表者会議」の構想の実現を願うのは、わたくしだけではないと思います。
(みうら しげじ

社会学部教授)

*三浦先生には、93年度の勤務員研修会の記録をもとに原稿を書いていただきました。ありがとうございました。